

佳作

ごめんなさい

山崎幸子

お母さん、昭和三十七年、五歳の私が、初めて幼稚園の遠足に行ったときの話をします。

初夏の木陰でのお弁当タイム。包みを開けると、ピカピカの赤いアルミの弁当箱。わーい、何が入っているんだろう？大喜びで蓋を開けた私は、次の瞬間眼を疑いました。

「え、これだけなん？」

中には俵型の海苔巻きおむすびが六個だけ。周りでは友達が嬉しそうに花形のゆで卵やタコのウインナをつまんでいます。私は簡素な自分の弁当が無性に恥ずかしくなり、おむすびを一つ取り出して蓋を閉めました。一口食べると、大嫌いな梅干しが顔を覗かせました。

おかずがなくちゃ食べられない。おむすびを弁当箱に戻そうと再度蓋を取った瞬間、悲劇が起きました。中のおむすびが全部転がり出てしまったのです。五個のおむすびは見事に敷物を横切り、土の上に着地しました。

「あつ、おむすびころりんだ」

誰かの笑い声。それを聞いた私は、土にまみれたおむすびを素早く拾い、弁当箱に押し込んで蓋をしました。よごれたおむすびを人に見られるのが無性に恥ずかしかったのです。

半世紀も昔の話で、その後は覚えていません。でも、今なら分かることがあります。貴女は、私の二つ下の弟を背負いながら、一家で切り盛りしていた店の手伝いで忙しかった。

それでも娘の初めての遠足におむすびを握り、初夏なので傷まないように梅干しを入れてくれた。副食までは気が回らなかったと思います。土にまみれ、ほとんど手つかずのおむすびを見た貴女は、心を痛めたことでしょう。

当時家にはかまどがあり、毎朝火を熾し、羽釜でご飯を炊くのは貴女の仕事でした。パリパリのお焦げができた、炊き立てのご飯で握ったおむすび。そんな手間をかけたご飯は、今なら贅沢の極みです。

あの日に帰れたら、私は貴女に謝りたい。ごめんなさい、お母さん、貴女の心を込めたおむすびを台無しにして。

私は見栄っ張りで我儘な子どもでした。